

令和七年度

龍谷大学付属

平安中学校入学試験問題

受験番号

# 国語

## 解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があつたら、解答用紙をおもてに向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。(問題を持ち帰ることができません)



問題は次のページから始まります。

著作権の関係でこの問題はホームページの掲載ができません。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

五年生の少年は『本町一丁目』のバス停から『大病院前』のバス停までバスに乗って病院に通っている。入院している母をお見舞いするためだ。初めて一人でバスに乗ったとき、緊張しながら小銭を握りしめ、急いでバスを降りようとしたところ、バスの運転手に「停まってから歩かない」と強く注意された。ある日、父から「こつちの方が得なんだ」と十一枚綴りの回数券を渡された。「これを全部使うことはないから」と言われていたのに、一週間足らずで二冊の回数券を使い終わってしまった。父と相談する中で、回数券よりもさらに得な定期券を買う案もあったが、結局バスの車内で回数券を三冊買うことになった。

次の日、バスに乗り込んだ少年は前のほうの席を選び、運転席をそっと覗き込んだ。あのひとだ、とわかると、① 胸がすぼまった。

初めてバスに一人で乗った日に叱られた運転手だった。その後も何度か、同じ運転手のバスに乗った。まだ二冊目の回数券を使いはじめたばかりの頃、整理券を指に巻きつけて丸めたまま運賃箱に入れたら、「数字が見えないとだめだよ」と言われた。叱る口調ではなかったが、それ以来、あのひとのバスに乗るのが怖くなった。たとえなにも言われなくても、運賃箱に回数券と整理券を入れてバスを降りるとき、いつもムスツとしているように見える。

嫌だなあ、運が悪いなあ、と思ったが、回数券を買わないわけにはいかない。『大病院前』でバスを降りるとき、「回数券、ください」と声をかけた。

運転手は「早めに言ってくれないと」と② 顔をしかめ、足元に置いたカバンから回数券を出した。制服の胸の名札が見えた。「河野」と書いてあった。

「子ども用のでいいの？」

「……はい」

「いくらのやつ？」

「……百二十円の」

河野さんは「だから、そういうのも先に言わないと、後ろつかえてるだろ」とぶっきらぼうに言って、一冊差し出した。「千二百円と、今日のぶん、運賃箱に入れて」

「あの……すみません、三冊……すみません……」

「三冊も？」

「はい……すみません……」

大きくため息をついた河野さんは、「ちよつと、後ろのお客さん先にするから」と少年に脇にどくよう顎を振った。

② 少年は頬を赤くして、他の客が全員降りるのを待った。お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、と心の中で両親を交互に呼んだ。助けて、助けて、助けて……と訴えた。

客が降りたあと、河野さんはまたカバンを探り、追加の二冊を少年に差し出した。

代金を運賃箱に入れると、「かよつてるの？」と、さつきよりさらにぶっきらぼうに訊かれた。「病院、かようんだったら、定期のほうが安いぞ」

わかっている、そんなの、言われなくたって。

「……お見舞い、だから」

かほそい声で応え、そのまま、逃げるようにステップを下りて外に出た。全然③ とんちんかんな答え方をしていたことに気づいたのは、バスが走り去ってから、だった。

夕暮れが早くなった。病院に行く途中で橋から眺める街は、炎が燃えたつような色から、もつと暗い赤に変わった。帰りは夜にな

る。最初の頃は帰りのバスを降りるときに広がっていた星空が、いまはバスの中から眺められる。病院の前で帰りのバスを待つとき、いまはまだかろうじて西の空に夕陽が残っているが、あとしばらくすれば、それも見えなくなってしまうだろう。

③ 買い足した回数券の三冊目が——もうすぐ終わる。

少年は父に「迎えに来て」とねだるようになった。車で通勤している父に、会社帰りに病院に寄ってもらって一緒に帰れば、回数券を使わずにすむ。

「今日は残業で遅くなるんだけどな」と父が言っても、「いい、待ってるから」とねばった。母から看護師さんに頼んでもらって、面会時間の過ぎたあとも病室で父を待つ日もあった。

それでも、行きのバスで回数券は一枚ずつ減っていく。最後から二枚目の回数券を——今日、使った。あとは表紙を兼ねた十一枚目の券だけだ。

明日からお小遣いでバスに乗ることにした。毎月のお小遣いは千円だから、あとしばらくはだいじょうぶだろう。

ところが、迎えに来てくれるはずの父から、病院のナースステーションに電話が入った。

「今日はどうしても抜けられない仕事が入っちゃったから、一人でバスで帰って、って」

看護師さんから伝言を聞くと、泣きだしそうになってしまった。今日は財布を持って来ていない。回数券を使わなければ、家に帰れない。

母の前では涙をこらえた。病院前のバス停のベンチに座っているときも、必死に唇を噛んで我慢した。でも、バスに乗り込み、最初は混み合っていた車内が少しずつ空いてくると、急に悲しみが胸に込み上げてきた。シートに座る。④ 窓から見えるきれいな真ん丸の月が、じわじわとにじみ、揺れはじめた。座ったままうずくま

るような格好で泣いた。バスの重いエンジンの音に紛らせて、うめき声を漏らしながら泣きじやくった。

『本町一丁目』が近づいてきた。顔を上げると、車内には他の客は誰もいなかった。降車ボタンを押して、手の甲で涙をぬぐいながら席を立ち、ウインドブレーカーのポケットから回数券の最後の一枚を取り出した。

バスが停まる。運賃箱の前まで来ると、運転手が河野さんと気づいた。それでまた、悲しみがつのった。こんなひとに最後の回数券を渡したくない。

整理券を運賃箱に先に入れ、回数券をつづけて入れようとしたとき、とうとう泣き声が出てしまった。

「どうした？」と河野さんが訊いた。「なんで泣いてるの?」——ぶつきらぼうではない言い方をされたのは初めてだったから、逆に涙が止まらなくなってしまった。

「財布、落としちゃったのか?」

泣きながらがぶりを振って、回数券を見せた。

じゃあ早く入れなさい——とは、言われなかった。

河野さんは「どうした?」ともう一度訊いた。

⑤ その声にすうつと手を引かれるように、少年は嗚咽交じりに、回数券を使いたくないんだと伝えた。母のこともしゃべった。新しい回数券を買おうと、そのぶん、母の退院の日が遠ざかってしまう。ごめんなさい、ごめんなさい、と手の甲で目元を覆った。警察に捕まってもいいから、この回数券、ぼくにください、と言った。

河野さんはなにも言わなかった。かわりに、小銭が運賃箱に落ちる音が聞こえた。目元から手の甲をはずすと、整理券と一緒に百二十円、箱に入っていた。もう前に向き直っていた河野さんは、少年を振り向かずに、「早く降りて」と言った。「次のバス停でお客さんが待ってるんだから、早く」——声はまた、ぶつきらぼうになっ

ていた。

次の日から、少年はお小遣いでバスに乗った。お金がなくなるか、「回数券まだあるのか？」と父に訊かれるまでは知らん顔しているつもりだったが、その心配は要らなかつた。

三日目に病室に入ると、母はベッドに起き上がって、父と笑いながらしゃべっていた。会社を抜けてきたという父は、少年を振り向いてうれしそうに言った。

「お母さん、あさつて退院だぞ」

退院の日、母は看護師さんから花束をもらった。車で少年と一緒に迎えに来た父も、「どうせ家に帰るのに」と母に笑われながら、大きな花束をプレゼントした。

帰り道、「<sup>⑥</sup>ぼく、バスで帰っていい？」と訊くと、両親はきよんとした顔になったが、「病院からバスに乗るのもこれで最後だもんなあ」「よくがんばったよね、寂しかったでしょ？ ありがとう」と笑って許してくれた。

「帰り、ひよつとしたら、ちょっと遅くなるかもしれないけど、いい？ いいでしょ？ ね、いいでしょ？」

両手で拝んで頼むと、母は「晩ごはんまでには帰ってきなさいよ」とうなずき、父は「そうだぞ、今夜はお寿司とるからな、パーティーだぞ」と笑った。

バス停に立って、河野さんの運転するバスが来るのを待った。バスが停まると、降り口のドアに駆け寄って、その場でジャンプしながら運転席の様子を確かめる。

何便もやり過ぎして、陽が暮れてきて、やっぱりだめかなあ、とあきらめかけた頃——やつと河野さんのバスが来た。間違いない。

運転席にいるのは確かに河野さんだ。

車内は混み合っていたので、走っているときに河野さんに近づくことはできなかった。それでもいい。通路を歩くのはバスが停まつてから。整理券は A。

次は本町一丁目、本町一丁目……とアナウンスが聞こえると、降車ボタンを押した。ゆっくりと、人差し指をピンと伸ばして。

バスが停まる。通路を進む。河野さんはいつものように不機嫌な様子で運賃箱を横目で見ていた。

目は合わない。それがちよつと残念で、でも河野さんはいつもこうなんだもんな、と思い直して、整理券と回数券の最後の一枚を入れた。

降りるときには早くしなければいけない。順番を待っているひともいるし、B ひともいる。

だから、少年はなにも言わない。回数券に書いた「ありがとうございまして」にあとで気づいてくれるかな、気づいてくれるといいな、と思いながら、ステップを下りた。

バスが走り去ったあと、空を見上げた。西のほうに陽が残っていた。<sup>⑦</sup>どこから聞こえる「ごはんできたよお」のお母さんの声に  
応えるように、少年は歩きだす。

何歩か進んで振り向くと、車内灯の明かりがついたバスが通りの先に小さく見えた。やがてバスは交差点をゆっくりと曲がって、消えた。

( 『小学五年生』所収 重松清 「バスに乗って」 )

問1 線①～③のことはについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 顔をしかめ

- ア 不快感を顔で示し
- イ 困った表情をうかべ
- ウ 怒りをおさえて
- エ 無関心をよそおい

② とんちんかんな

- ア 説明が足りない
- イ 思いやりのない
- ウ 納得できない
- エ つじつまが合わない

③ かぶりを振って

- ア 頭を上下に振って
- イ 頭を左右に振って
- ウ 手を上下に振って
- エ 手を左右に振って

問2 線①「胸がすぼまった」とありますが、どういふことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア バスの運転手が以前叱られたり、注意されたりしたことのあ  
る人だったため、怖くて緊張しているということ。

イ いつも何かしら注意してくる運転手だったので、今度こそ叱  
られないようにしようと意気こんでいるということ。

ウ バスの車内で回数券を買うのが初めてなので、知っている運  
転手だとわかり、少しほっとしているということ。

エ 回数券を買わないといけないのに、いつ運転手に声をかけれ  
ばよいか分からず、とまどっているということ。

問3

線②「少年は頬を赤くして、他の客が全員降りるのを待った」とありますが、この時の少年の状態を表す慣用句として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 顔をつぶされる

イ 肩身がせまい

ウ 手をゆるめる

エ 首をかしげる

問4 線③「少年は父に『迎えに来て』とねだるようになって

た」とありますが、なぜですか。理由を説明した次の文の□にあてはまることばを、文中から三十字程度でぬき出し、はじめとおわりの五字を答えなさい。句読点なども字数に数えます。

少年は□と考えているため、帰りだけでも父に迎えに来てもらうことで、できるだけ残り少なくなった回数券を使わずに済ませたいから。

問5 線④「窓から見えるきれいな真ん丸の月が、じわじわ

とにじみ、揺れはじめた」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 混み合っていた車内が少しずつ空いてきたため、窓からきれいな月が見えるようになり、感動して涙を浮かべているということ。

イ 回数券を使うしかないという状況を受け入れられず、少年がバスの揺れに身を任せ、月をぼう然と見つめているということ。

ウ 父に迎えに来てもらえなかったことがショックだったが、きれいな満月のおかげで少し心がなぐさめられて、涙が引いてきたということ。

エ 母の前やバス停のベンチでは我慢していた涙が少しずつあふれてきて、その涙で少年の目になっている月がぼやけてきたというところ。

問6 線⑤「その声にすうっと手を引かれるように、少年は

嗚咽交じりに、回数券を使いたくないんだと伝えた」とありますが、この時の少年について説明したものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつも不機嫌な様子できつく注意してくる人には、どうしても最後の回数券を渡したくなかったので、泣きながら訴えれば許してくれるのではないかと考え、お願いしてみることにした。

イ これまで様々なことで注意をされてきたのに、今日は回数券を入れようともせずに運賃箱の前で泣き出してしまったので、叱られないようにきちんと事情を説明しないとイケないと考えた。

ウ いつも厳しく注意してくる人に今日は何も注意されることなく、優しく声をかけられたことで、驚きつつも安心することができ、冷静に自分の事情を伝えられるようになった。

エ ぶつきらぼうな言い方しからない人に心配する声をかけられ、いつもと違う優しさに触れたことで、自分の中でおさえていた母への思いがあふれてきて、ようやく口にすることができた。

問7

線⑥「ぼく、バスで帰っていい？」とありますが、少年がバスで帰ろうと思っっているのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 病院からバスに乗るのも最後となるため、最後の回数券を使い切り、母のお見舞いのために病院に通わなければならなかった、つらく寂しい日々を一人でしみじみと振り返りたいと思ったから。

イ 病院からバスに乗るのも最後となるため、河野さんにこれまでに注意されてきたことに気をつけてバスに乗ることができるようになって成長した自分の姿を、ぜひ両親に見せたいと思ったから。

ウ 河野さんの運転するバスに乗って、降りるときに最後の回数券を運賃箱に入れることで、母の退院と、先日、最後の回数券を入れないのを許してくれたことへの感謝を伝えようと思ったから。

エ 河野さんの運転するバスに乗って、先日、回数券を使いたくなかった自分を助けてくれたことへのお礼を伝えるとともに、河野さんが自分のことを覚えてくれたか確認しようと思ったから。

問8

A・Bにあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

A

ア 回数券の前に入れる  
イ 丸めてはいけない  
ウ 運転手に見せる  
エ 取らないといけない

B

ア 次のバス停で待っている  
イ いつも怒っている  
ウ 家に帰らないといけない  
エ 運転手に話しかけない

問9

線⑦「どこかから聞こえる『ごはんできたよお』のお母さんの声に応えるように、少年は歩きだす」とありますが、この時の少年の心情を説明したものととして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 最後の回数券を使ってバスに乗ったことで、母のお見舞いに通わなければならなかった義務感からようやく解放され、晴れやかな気持ちになっている。

イ 河野さんの運転するバスになかなか出会えず、帰りが遅くなってしまったので、家で待っていてくれる母のためにも急がなければならぬと思っている。

ウ 家に帰ればこれまで不在にしていた母が待っていてくれることに安心するとともに、河野さんにも一方的ながら感謝を伝えることができたという達成感をいだいている。

エ 母の退院は喜ばしいことだが、バスに乗る必要がなくなり、せっかく仲を深めることができた河野さんと会うこともなくなるのかと思うと、寂しい気持ちになっている。

問10

文中の表現と内容について説明したものととして、ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 主人公の少年にあえて名前をつけないことで、読者が少年に感情移入しやすいようにするとともに、少年が自分の考えを持たない気弱な性格であることを表している。

イ 「夕暮れが早くなった」と始まる段落では、バスから眺める外の景色の変化について描写すること、少年が病院に通っている期間が長くなり、どんどん季節が進んでいることを表現している。

ウ 少年が最後の回数券を使わずにすむように、河野さんが運賃を代わりに支払ってくれた三日後に、母の退院が決まったという展開にすることで、両親も河野さんの行動に感謝し、少年がバスで帰ることを許可する展開を生んでいる。

エ 最後の段落で少年が降りたバスを振り返る場面では、「車内灯の明かり」が点滅している様子を描くことで、河野さんが「回数券」に書かれたメッセージに気づいて返事をしていることを暗示している。

三 次の各文の（ ）にあてはまる敬語として、最もふさわしいものをあとから一つずつ選びなさい。同じことばは二回以上使えません。

- ① 校長先生が教室に（ ）。
- ② 明日の三者面談には父が（ ）。
- ③ 私がお客様のお話を（ ）。
- ④ 後ほど、私からお電話（ ）。
- ⑤ 王様はこれから夕食を（ ）。

いたします いらっしゃる うかがいます  
まいります めしあがる

四 次の――線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 付録を目当てにザツシを買う。
- ② 日本ジュウダンの旅に出る。
- ③ 新政府のカイカクに期待する。
- ④ 植物のコキュウの仕組みを学ぶ。
- ⑤ 大雪ケイホウが発令される。
- ⑥ ピアノの演奏会が開かれる。
- ⑦ 階段から落ちて足を骨折してしまった。
- ⑧ 人を傷つける過激な発言は取りしまるべきだ。
- ⑨ 子どもの人権を守るのは当然だ。
- ⑩ 三年間の思い出を胸に刻む。

これで問題は終わりです。